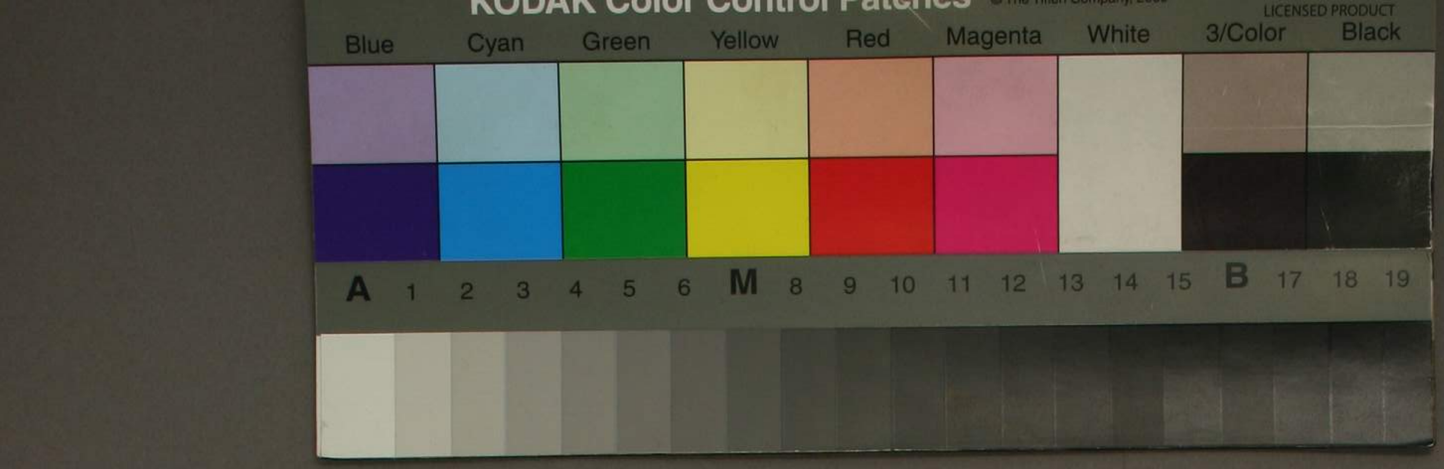
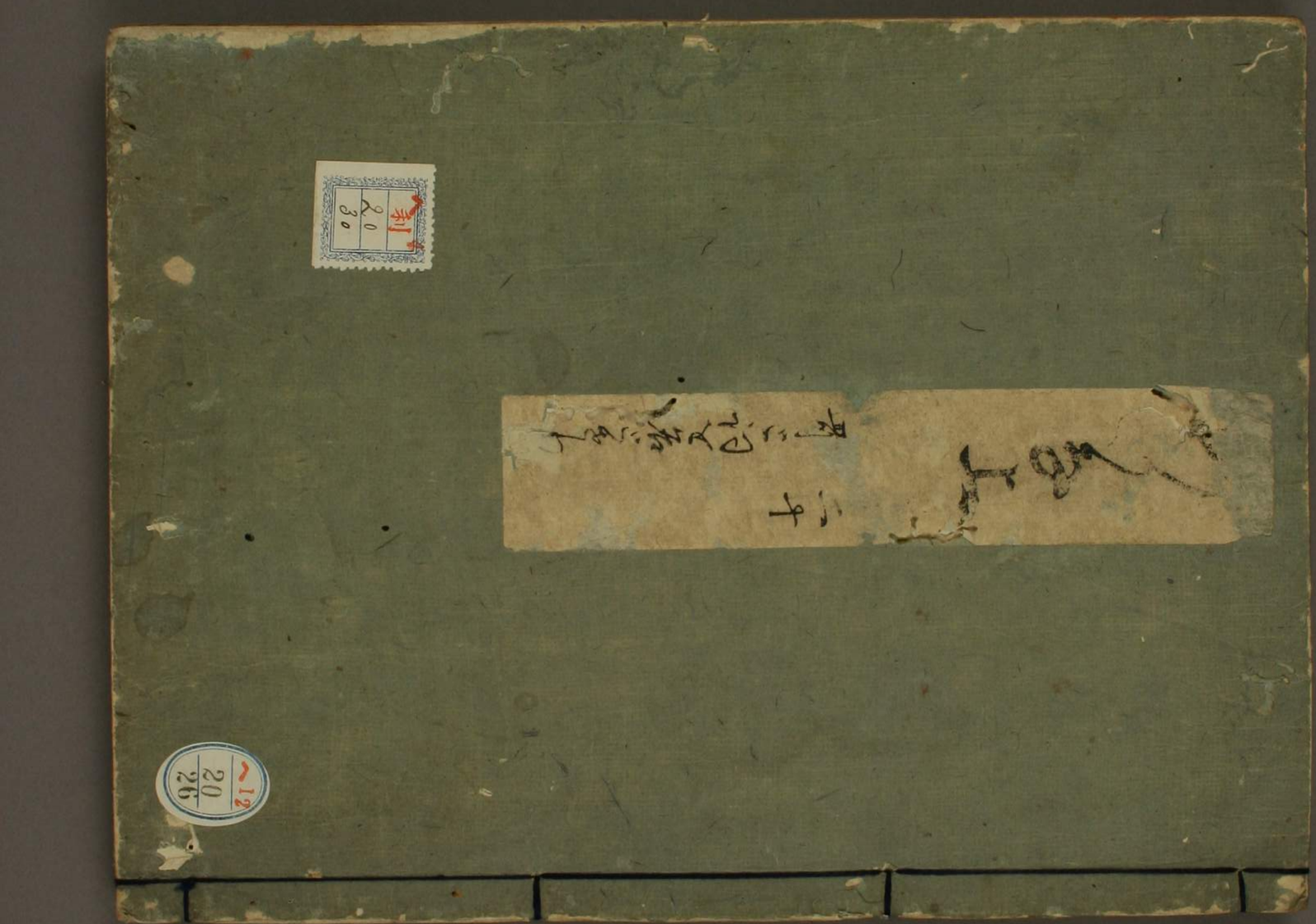

KODAK Color Control Patches
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



特12
刹
20
26

源氏廿九帖 四十二の巻まで

朱雀院のれい門おりしもゆきの後そこはひろ
御もてなしやうやうつきてくらうおびしく
なりゆくうちにいとびんなきことをおぼし
めしわづらひ（年比のよすがを遂げさせ）
宮のおはしまさんことをいかでかくてと
おぼしめしよろづにおぼしめしやすらひ
まどさせ給ふほどの名ごりをしくおぼされ心
もうけどもさせ給ふにもおぼしめしたつ事
なくてまつりて女三の宮（女三の巻に源氏の事とりこめ）
中ごろ（よとろ）ぞつぐとそそしくて（もんざ）の源氏ぞ

おりまゐりけるまぎは場と
まうのて(みまもあるく)ねうさうしく
ひとそうしてうしろもおりもそで
うさもそのすぢくるく袖も
袖一(勝月)おれまぢらひのほどもこゝばそげまて
大和の国柏のそをまいつきを
うつるぶくもてなし一行
(保氏文)けをわて(朱雀)そうどもは心のまゝにさ
まよいふこゝろをおもひうるさ
だひるくちもうて世中をうつろふ
やうにそう(保氏文)のおまるの

れ中にまぢりてうるさきひうてびさ
ろうし給そのほどれうし十三四ぢりにおもひ(朱雀ノ院)
つとそむきすてやまごもりもん院の(女三ノ宮)せにうち
とうてそれをなのむびて袖一給もんと
すんとうごこのれいくをうもろのくなびし
うげく西山もろれて(仁和寺)つうりそて(某ノ)うりろもを
給うんほどのれいそぎをもそへてまる
その(女三)ののれもざのくをおびて袖一のそうも給院(某)乃
うちるやむごとくおびてうれてうぢだ
をびさうよいそぢおうびまで
すてゆへあうぢうをびこのれ(女三)うと

[illegible]そのうさくをもんとと
[illegible]ここちよいれそうでむどもあり[illegible]
[illegible]うられもやまるそへて[illegible]
[illegible]れころづひろもんとさそうをみて[illegible]
[illegible]のへうそ[illegible]
[illegible]へりずれそうれもばしまし
[illegible]家のうくておりますれす
[illegible]うけれぐ[illegible]ごろのれ物[illegible]
[illegible]
[illegible]れ心づひもごそそしもく[illegible]
[illegible]ましいとようくもびさをみてれうもろこぞも

[illegible]ろろろ[illegible]ろぐ[illegible]
[illegible]ーまへぐうもろやす[illegible]
[illegible]せうこのろこもぬ[illegible]
[illegible]のろりそぐまりこそをひやるん[illegible]
[illegible]れよもぐりめべう[illegible]
[illegible]うへよこそ[illegible]
[illegible]あすくへよおそ[illegible]
[illegible]いよろありくるこそらづれをもうやうるん
[illegible]れ心ぬてばし
[illegible]るづのよそのやうもろこそろる
[illegible]よもゆづりぬ[illegible]

さぶひとりとゝみまゐ
てん後のつゐでにとぶらひきこえ
ろめくうるゝくゐとゝれやをゝのびてきこえ
ゝきこえ給ふ。女君 女れまもろうう
つげきこえ給ふ。源氏の君 女れの人ゝりいまきこえ
ときめきこえ給ふゝゝれいどころ
ゐどころえうきこゝ
ゐどうまて。げつつまだつぎこゝとい
まゝくよ心ときめて。ごひう
ぶすもやとぞをゝきこゝ
このれゝとをきこゝちびく。ゝれゆくまゝは

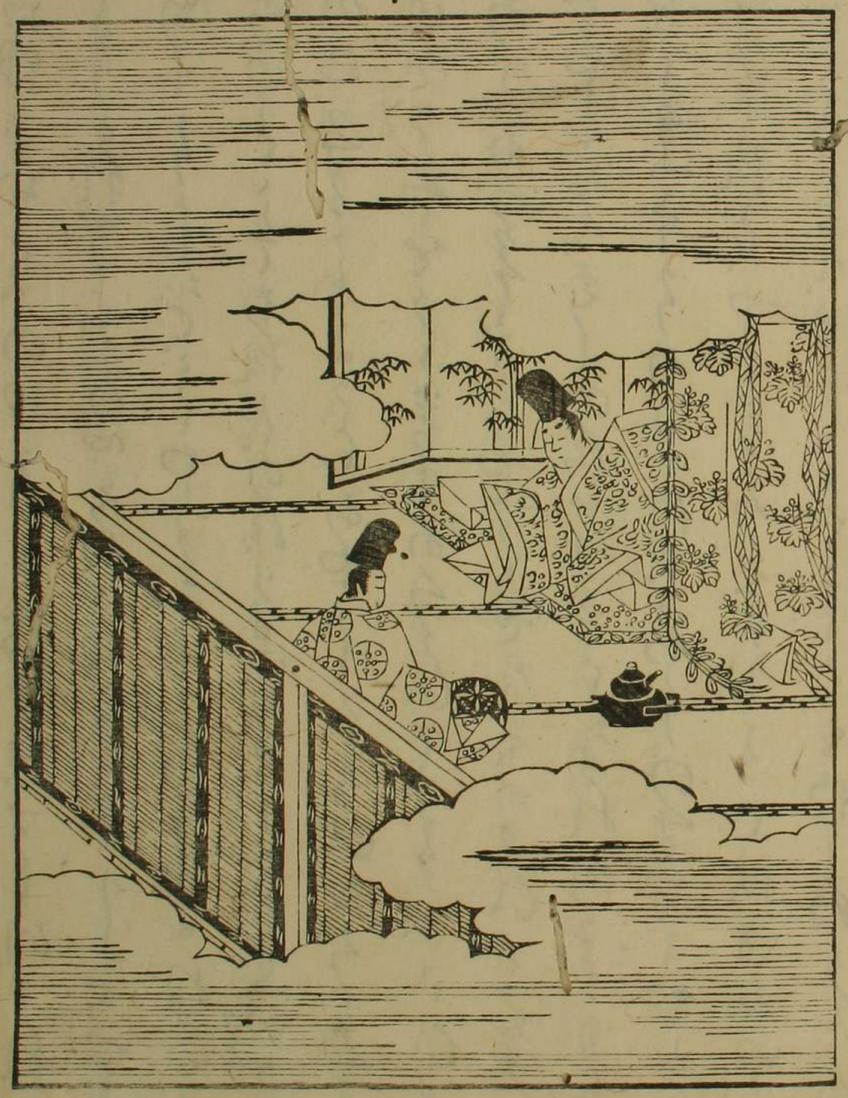
れもやこゝまゝくよとかくうりまきこゝをまて。こすの
ときもぶで。こゝ給ひぶれまゐけまて。ときぐ
ゐやまもゝ給ふこともありつれど。うとくこうちこへを
やこゐときこゝ由ゐのおりゝまきこゝをつと。ひびい
ゐ給ふゝぶうりゐゝれこゝおとこゝ
也こゝまゝへれどうををその也うりそめて
まうりまくへぐいつまもゐこゝをきれ
ありさ由を心やすぶ所ゐまゐ給ふ
ぶうい心をひこゝてありこゝきこゝしゐ。六条院
うりもれとゐゝひとぶくありぶゐもまゐう
ゝまゐべきこゝう。源氏 院ぶぐうろこゝびゝ

ふるさとを経中納言のうちのぞくを朱ノ
うちるゝつれて、れもみぐろうそうやうるり。朱ノ前
院のうへの、つぼ桐ノ壺
ぬ中ごこの院ノ源のれこと、うみれ冷
ぬんざりつそのぬひとそうをお朱ノ仕うる
ありて、ごろぐりあれぐろくのこころせも
うるこぶるぐ、そるこのやまりる。そろ
とれそまつることもありえんとやうぐ、び
ことあれて、そのうこのへるうこそ紙
るんもこ後ろめ、さうへどこれ
うへるりめれぐくるぐのてこうるこぐ

その むらひこ、ゆぐめうこちん、うこへぐり
ぬうりけう、いるこんありる、そのれろぐへ
はころぶべくんと、せんもをむけるぐひけうをつる
ま心のびをぐてのて、まぐるぐも心をを笑
ぬふつまるもるくむつびるこへるもうぐる中とるり。
るこ、年どのそろうるこそへてこのろのやこる
立もぐるうくるかやとて、中朱ノ早十二ようその
こま笑こるちこうるこ、相つぐ帝
れ此送云ぐへぐつ
すぬのれあこけるこ、

おまへがをもおつ給ふ
このわざのり幸の後いつまへのことをそへて
ゆくく考つゞもくちんおぼしのまゝ
べきことでもあり。まづ(源)こゝひまの
しづまりべきこと。おほやけよりも(タ)仰納云のこと
ども。これつゐの給ひ。中納(タ)言
うるさきをくもおもふ(源)ことをうけ給はりて
まうのぼりて。おほやけよりもつゐ
世中のことをうけまはりあつかふべきよし。大かの
ことゝもつゐて。うちくつろぎ物ごゝろもあるべきの
いそがしさ。いまへのうれしさはありてちん

ちゝうしめやうして(源)おはしまさ
おほやけのれうにもろこしやうにて。お院(おほつゐ)のれ遠云(をんゝ)の
うちひをうまへんとて。ひとへてこもおはし
のちいまよゝをもちて(源)
こともえつゝまつゝず。れ(来ノ)位よおもひまゐらせ世
うにゝ(源)ゝのうつゝ施もをこなひず。う
うちゝのへでおはしてその心ざしをとげて。れ
らんをうちもちて。今(来)うくまつりごち式(へそ)
うりて。たゞ(源)心のうちをも陽
ちゝまはしうちをさすゝ
ちゝのまそびまして。をのづ



月日をすごしてこゝろんぼうくるゝ
ほど養(やしな)ひ給(たまひ)二十(はたち)まもなく
いとうくるゝのひすでにて
ほひて。いとゞこゝろをくだきて
うちもまもらひを給(たまひ)つゝ
いうしろこゝろをれをあやぶ
ろきこゝろ

朱訂 ねさなくどのつるうり。いつたすこいれは
うりうれど。ごごろ心えめさ
ねりうーを。ーやすさねうこすずよねるく
ぶやくそあれと。のおうそうすることを。いうは
のおうすることよく。あやーくひめぐすは。
ぶひめやとうくそーあうひて。さうべさひく
あくぶあづて。こうやすくせをもねまれそれ
ぶやくちん。そーのおいすうとを。ぶびうりり
ふーのふこうありうれぐ。さやうのすぐうわとは
そひうれど。おとこころえぐ。ぶもねうるいく
こうこうしこうちん。ぶ訂ぐうぐしくまねうは。

うろべまうくひぐくのこちんとぐうそうして
やこめ。おあるどいのぞそて。いとき疑くも
そ結ケうこうういれ。おあめでこうぶあつまりて
字ゆうを。おいちくるいで。老人訂さりとき。ぶ涼完のぞ
うりまおてもーれありこ風ぶはえうずくく字て
結いぶあり。いとめもあやまこそうまれし結
ーれといひこうふをこそうまれし結
れいいこ風くこうーへぞうーいまはまる
そうまもわびまうて。ひうとはれをいびき
ーやとこゆうねひちん。いぐぐうまるふ。
うううぐちてもうぐーをうそれぐ。

らいうくおぢやうよめもとやすうを、よ
うちよりてそゝろわれごとをいひこぶれあそべば
そのこゝろつけていうち拍ちまくあらごやういうさ
ちうくうちゝとものちくびちさゝでうよ
ありごとくれおよごとよもとこわれて、
めづくちうへのそ拍ちうのひさは
（胴つかり帯）ていうのうごりちうくうちうで、うごへて、そくこちうど、
心のものくよもとごくばひごとくて、ゆがうちうは納云
こもちうごぬよそうびとうあまりてや、寧おまて
大和のものへりうん、それよタこれもつとそよおく

すこゝちもめついづさくのてのおぼしのまゝうかか
めりうくおこれもあちくをとうちうごとくのごえんこもりね
ちどいうれもあちくをとうちうまくおやまりてもも
おうすけまちうちうおぼしいとゝもちありちごと
かぞさうち給ひめうやのいとくびうて、うくく
ちよ心ちさされ宿拍ちうを（まゝ）こゝろてまつり給よも、兄（刊）
そやくちりこのかまちうへんくをだ、
そくくちうへんひとのそろやを
うんよおづけさくごやちごぼしおとちごと
れめれとごともくおてれ（ママ）もぶのおれのくちごとの給
そうつごよ六条のおとゝ（ママ）のそこも

むすめ、おふしたてんやうは、てのこゝろをおもへ
りても、かくまん人へまかせ人のあるはいおほき
かし。内には中宮さふらひ給。次々の女御達
とても、いとやんごとなきかぎりさぶらひ給ふに、
はかばかしき御うしろみなくて、さやうのまじらひ
いと中々ならん。この権中納言の朝臣のひとり
ありつる程に、うちかすめてこそ心みるべかりけれ。
わかけれども、いときやうさくに、おひさきたのもしげ
なる人にぞあめるを、との給はす。中納言はもとより
いとまめびとにて、年ごろもかのわたりに心をかけて
ほかざまに思ひうつろふべくも侍らざりけるに、

その思ひかなひては、いとゞゆるぐかた侍らじ。
かの院こそ、中々なほいかなるにつけても、人を
ゆかしく思ぼしたる心は絶えずものせさせ給ふなれ。
その中にも、やむごとなき御ねがひふかくて、前
斎院などをも、今に忘れがたくこそ聞え給ふなれ
と申す。いで、そのふりせぬあだけこそは、いと
うしろめたけれとはのたまはすれど、げにあまたの
なかにかゝづらひて、めざましかるべき思ひはありとも
なほやがて親ざまにさだめたるにて、
さもやゆづりおきてまし、など思しめす
べし。まことにすこしもよづきてあらせんとおもはん

女子もろこべおもてぐくへみれ(保)
あれぐくまろしくれ(朱)つくぐくもねこのみれ
あひぐいさぐり心ゆくおりさ夜ふけてすぐ
夜はしくれ(朱)れ女のあざむつびもろまつ時もぐ
ともぐもずむつびもろまつ時もぐ
さるんなぼくしまりそれ心のもちよ(脱)心の
ことりぞやとの給ひきそ(比)
玄のれともそくべこのれうしろぐ
どもれるよをもくしきれのよれもうと
左中弁あるれ院(保)のちもる人まそぐうしび
つうまもろもりこのそ(女三)やまも心をもとまそ

さうくへべまいりうこよ(たゝ中弁ノ)おのて(朱)拍板すりいでよ
うへもんもろくれ乱文まそこそ給しを(保)院よりあらべまいり
ひもりかくまも寺こそ笑こをのへこそもそ
夜ようけてうろをそまもり(朱)ぐりつの
てもれうもろくし給へあらかれまいげるを
うへを垂(とき)そまりてまるまごろよそひ笑のべき
ひともれべをのれうまもろそもあるな
ぐりの文づくへよんあんづ心ひとろもくも
あぐでをのづくひのおのくまおりまし
りぐもさ笑もあるんとさは(比)うる夜り

えだうつくしうさんぜうよりもとくもこのれいとこそまちうけバつうまちうくもあべきこうこそすぐとそうくもすべてまちうけれどそんなかいつとすくさそぐうくおうまちうけれだうろぐよろぐくあまるのれ中よりつきてさをあべきうをいそでちりもすへまぐとうふよ弁いうなうべきれこそうあんほ院ありやしきまでれ心ちぐくうまてもこそめのへるいれこうまうようさもよこそもあうこぐりけうをもうぐうつけてあうりのひて。おまうぐへまのへれど。

やむごとなくおぼしうかりて。ひとうところもあれバそれよこそうそて。うひろげうすまるおうをうぐくそいおうありて。まうやうなりまやうもあうぐいうぐきへとまあうこと。こちもふくびてをうちのふくいえあうぐとそいべをうれどれいうぐとぐうろうろうありてもんおゆうろいひうれうへをおのすぐうそてる。ふよ心もとうこといちる紙。へのまぐうをもあひつぐ心うもあうこそもあうとるん。つよようくのすうひぐこもおぼのおうをのわくぐこ。

ドつるを。うるさはいもとげざりめぐさ心ちの
するよ。そのまよはされてゐん。れ六条のおとゞ
げよりともをのくそうそて。うろやすさうそ
そうりゐんをうるべくりあるもれさる
べき人ごをそうべくそうもあくぞーとてもく
ても人の心うるりのどるおそはるの
られあーごとうろやすさうるべくは
をうるー人るりさでろーるべくそれ
ぎりうれあくん。覚ゝ
おるですぢうそ。ことへつうもくおうべさ
るれあーねど。おりいくるべうーく。

一

をゐさうをられて。すうーろびうおゆや
すーうよくん。れさうくへをいとくれもーげちく
ちんあるまる。朱ノ引用べき三ノ条司をのぞむとそうり
ちうるよあれまめやうよをてるべさ
れどさすぢよつよぞそ。ちをめぢ後しく
ふけすちうるべさむーもろ
やうちるうひまい。何ぢ
あるよくそうてそありられぢひへよる
ちくもちめんうるぢうをうこさるよおも
さぶめんいとあぞうちーるべさうぢよ
ちん。右清乃條のうこ。脚。関係のもの。

されー・その人(柏)ぐるちん・らくねるど今まで
おめでとうございます・ありがとうございました・
べき筈・まだ・いつもむげもろびるほど
ありがとうございました・やあずさまでつ・
いろいろ・おめでとうございます・ひとまいめけて・
ざえもどもございまする・うぶまいよれろ終と
なるべき人なれば・ゆくすゑもそれぞれなるをみ
このめでたきそんまいうぐりで・おうやど・
ろぶまいまーひとり・(地)やうまもおばし
ようめでたきをばけても笑ひやまーなあ
人なるー・あやまくうちくまの結びすふ・ぶさ

めでたくまれをのづくとひろごりて・心をつく(柏)
さん人ぐなりり・おめでたきおとこの(柏)縁乃・
今までひとりのこあ・ぶさまでありて・ここちぶへえで
とさんるをうれそぶめをもでそるありま・
さやうまもをむけてまりてめーまきれ
ようんはいぐりまるめんばくおりて・
ぶくうんそそつくへ(脇)の結て・関白のんのさそ
こいれあの(以云)ののかのうさそつくへ結ありり・
ろぶうぐりるさ云の紫をつくてそうさせ・
れそうさ結うさ安(雪)いたち(ひげ)ねの木(むぐ)のうさを
まそぐーのそ(むノ)そうさんさまもありそ・

なづ
文のれもろ〳〵ろ抱しはけめろもそ〳〵つざ
ま。いとう〳〵といろれはし人ありろばいび
方ようけても。このひめ（十三）やを〳〵ちべてのさいろ片
ろもおろそ〳〵をるど。いづ〳〵くいもひまのべし。
等も言め。事雀院ろ片は心もれをこうさ海ろを
おり〳〵まろひ（ま）ろびいろろ（ま）ろ〳〵おばろ〳〵ろ〳〵立て。
れ（十三ノ）まざのろ〳〵おばし〳〵ろ〳〵海。ろ〳〵ろゆく
さろまるろびもろまで。いろろ〳〵のろもれもの
らひいろ〳〵（拍板朱雀院ニ云）愛のろ〳〵おもてはまりりでめそ。
ろ〳〵のあやろ〳〵ろをいまぎを也はず。ろろ〳〵ろ
ろろれのろびりをおばし〳〵やろそ。いろ〳〵くろと

ろろ〳〵くいやくごろ〳〵ろのへさをろまへり。れ
ろ〳〵ゆひよいおほさ（以）おろびを。いわてろり字そを
めろれで。ごろ〳〵しくおろろすひろろて。
まりろろおばし〳〵ろ。焼（未）のれろと。をむろ〳〵
ようそむろ手ははるびまり給。今（地）二前（左右右近）のお片返。
ま海りの工返ろるごかりありさりありを。あお
びろるめ〳〵ひろすけつまり給。ろろろ八人。
衣ど〳〵る。そろるもいそず。（今）うち芸安も海〳〵ず糸
ひどひて。いろ〳〵これひびろるり。（未）焼志
れ〳〵ろひびろそ〳〵ぞれひびろるり。（未）焼志
れ〳〵ろひびろそ〳〵ぞれ（こそど）。等（こそど）芸安を物（ふの）ろて
まろそ。心ごろ〳〵ろ〳〵ろ。範人衣。おさめ。

夜のうち地どもはほくもせ雨ふり云条院よりも
いとうひいとこころしてそうまれども人ぐも
掃ける出のおだのれ引出物ほどに按院よりぞまゐ
けり中宮よりもれさうぞくくそのそこ心ことよ
うしてうぞ。それとこをそ。家の程のよけ院のあ
まて。姫宮家のれ方よりいすべくの給をつれど。
うこそぞ中よりはけ
今よつこれがみのとぞ。
神さびよけ院ゆんでつけておそれよばし
野こそぞもありうう。おえ地けうういあぐと。
ゆつりそそしめくるほどざうれがれうも。むうの衣をがう。
朱
さつぐるこう地ももがろげ也をりぎのを
ぐのこさぶうまでぞ祝こそこうへ

別れさうでいつまでもそうもしてゐられないし、すまいろう修造ちかごろ洞もえらくめっきりして
めそうろ、それに更衣こそこの男をんおうえしをも
ゆすりこもてきさどうむりいく心あそうしう。
ふらでもづやうろうまよやでこまべくそうっう
けこほいさのてばだめうくをこのこと
おさうまよひうされてとそうの経の年間うり
始なりてれとうのきげさいとさもや源六条院を
すこれ心ちろうくと望をまして系のみれさ
うごりのこみちごこそこれありごくおりおり乃
みごくくさくまりまくれやまこくおよ

天皇の儀式というけごり経つずよれもてあひ
ぬしうさ面ちごい心こちまれ車ようそぎさ
めて例のとくくうめれ車ようてまりて
上達ちごうべきうごり車てそうまりう
多くる院ないうごくおせのてく
ふくされこうちをばしいうて前ありうう
引きさ面ちずごおりまして
うこひくうてこれまりのふりのくる此頃紙
ほりこまり給ふこうもさ紀こうれてうしく
とごめごくばこれごとうをえこひ
給ずお院ようをれまりしひうよれて

うちろめたくこそ
ひとを心ぐるしくてまつり給ふこころの
うちもさすがゆるしきれあるを面なれだに
がーすぐしがたくて（日）げに
すぢいつくしき海のやうにおもひつめ
ばうちわびぬるをんな仏けう最ごとに
いとゝこゝろさすおのせのまゝにうけのきこえおめれ
ゝのこゝろをまして
れこゝろをうごかしたまふべきにもあらず
そうそうろめかしきはいさゝかも
ゆくゝさのこゝろおもひしづめたまへれど

げにこゝろ恨（うら）めしきおりおりもあれ
ごとにこゝろをつくしたまふべしとは
あるまじきことのみうちおもほゆるをおさへ
なもなぐさめたまふ。すべてかの
まことのこゝろをうちとけてみえたまはざりし
すぢはなほりをしこゝろえがたくおぼえ
たまふれまもりめなりうるべき
こゝろをおもひあまりてのたまひ
のたまへくゝろしきことをいひて（ものの）
さとべきれおづるをこゝろにくゝ
仏とも美（うつ）しき姿（すがた）やうよちびうることゝれど

それもうきことなれんをけうくへのこと
をそく物うまも世をそうきのそこうづゝ
人をえうしてさうき面のことをしへるこゞひ
物うりうり。まいてくこの世をもちろく
うたてそゝこゝくきくいつべきもあるどまさ
ふうする中よも。物ごとにきことあらてさ面ぐゝ
そひつゞひ物はとよやうひをもりゆくみうり
うへすべきことをあゝめ月日のるゆけが心あいうう
きくちんうきうくいつきゆづうれどこのいそけ
るき関東(さんとう)をひとうもりそてそゞこそくてさう
べきうまなも心なゆゞーさゞめそおづけのへ

と笑しまうきうき紙(タ)物中納言(深川タ)などのひとり抱
行よすこうべくこそありそれなゝいまうちざ
こよもんざこれて。なうやうちうくゆるうこそ
まうめぐくゆるを。ゆゞすもまるあくて。なゞう
すくるこそゆるあ。こうじけるくゆるを。ゆうさ心
まそ。こうろこそこしまれ(十三ノ)ゆんこ。おこーまれ
びよこうてゆゆゞをこゞりこれこうゞ
うそ。つうまうりすやゆんとうこゞ仕
しさるのこもん。こうゞくゆるべをこうけ
ひさよおつ(比)ゆへめれゞあるゞの(ね)ゞもまう

（添ノ仮名ノ如ク）
それ（其）より遥（はる）かに打（う）ちも、れ（連）ぬ（奴）れ（連）ぬ（奴）
物（もの）をこそ引（ひ）きて、うつゝ（現）なき
ものから（故）、院（ゐん）のみまへ（御前）をんなを、
なぐ（慰）さめてまいらせ（参）ぬ（奴）。
あるすぢ（筋）のこともあれど、うさ（憂）忘（わす）れ
みてこゝろ（心）の課（つと）めどころ（所）ぬ（奴）。別当（べつたう）の院（ゐん）
ぬ（奴）そうよまいり給（たま）ふ。
いつぐ（継）れ（連）ぬ（奴）くつて、うさ（憂）
晴（は）るゝ（連）ぬ（奴）ど、この（此）女（をんな）
こゝろやすく（安）思（おも）ふ（連）ぬ（奴）ら（良）ん。
こゝろ（心）ぬ（奴）ばし（許）。

さぐめ（探女）ども、そもはのそ（其）給（たま）ふれど（さん）も、
ど（者）前（さいや）詣（まうで）をもねんじ（念）ごと（事）
つぐ（継）もなげ（無）しとげ（遂）ずと
こゝろ（心）やありしとをなど（さん）て
なくておのづ（ほん）からいつ（ほん）しかば
も、我心（わがこゝろ）ならまし（ほん）
つゐて（ゐ）中（なか）にいぐ（ほん）ひこゝろ（心）
給（たま）ふ（連）ぬ（奴）ど（者）祝（いは）ひ（ほん）ごと（事）
なぐ（慰）さう（ほん）今（いま）のうれ（嬉）しと
思（おも）し給（たま）ふ（連）ぬ（奴）。表（おもて）なれ（連）ぬ（奴）
隣（となり）おしこゝろ（心）あんもの（ぞ）

(源氏)
(宮と女二の上とこゝろ
うとくうらみ給ふ)
(源氏)

けうそくなどすべてそのものをもそのくらいそんのこうぶつをもそうすべて衣冬のれいぎこれすべてゆうつきやうの乃ゆうくうきうとてくしまはだんもうそんをのぞくをもつてをもてなすべきれいぎなりこれ心のそこよりうやまふべきなり

（浮）ぐ法とそくえんの名目ありれ心のうちまたはつうくへおぼしめすこともをもてなすべきれいぎなりけり

ひだぐへまやとおぼゆるくおそくまをすをめづらしくぐれ

月へぶそくえんのみもをもてなすべきれいぎなりけり

（後右衛門殿お大事く）おうるさきれいもいとうけうそくえんの

ありおるぐやうそのおもてなしぐれんぎをんとそく

のけぞんとうおぼんつきどもあうてくいつき先
そそうほどよもそれそうりかぶりのと
ち氏名つくぎそて始そ
れ箱まえおとくおとのそのろっとのへのこ
世中よこのれがそうりえめづくくそうをつす
べきことあくどのめそれこれの恨を
ねてそうりおばーまうけうそれば再びやうそ
れおそびありそうぐよをもちるよ承知そしう志
おとくの第一ひーおけられこもりさうまめて
どもの心をとぐめて引ちるそうとこと人いそそて

くくいろぶうをきものへでげよっとおもうてろく
おきくとろもづくひくなづいてどもおもひぎて
うひろぎうくくえけがあつぎそうとそろ
うそ衣よへぐおもいそべよもるぐびて、おと
あうほどもこぎもれうまろのうへぜも申く
ぶひろべそあるをごろまうをそし
ぎおそうさあそうすぐびのもれくれと
とのへられるかえまなもうろく、あしさ
まぎーのぐくちおとれをもいとゆうう
ちかて、うそうぐてきそうべのぐさ切ぐくあるを
てぞそうさるーのふそうそうの

ぼうれのちうしく・おつさうやうつきうあるかをつと
うまちもいつそそしぐりしをと・みこうちもおごろうき
治琴(こん)の琴(きん)の音うつくしひきおはしれことい宣旨(ぎゃうじ)殿(でん)ゐんれ地
うて・代(だい)く・ま一(ず)のあわりしれ琴(こと)を・弘徽殿(こきでん)の末(すゑ)つ
さ一ふ(ふえ)ハ聞(きこ)れこのこ給(たま)ことうせんとおほ(ほ)とぐの
おりのさうしをめうるれつうへくをおばすまうとあうれま
昔のことも思(おも)ひくはぶ(ぶ)しうきこもちひちきえ
とぐめ給(たま)ひぶ(ぶ)れ(ほ)ノうきさうのへりうをば
そそしきを給(たま)ふ(ほん)ま(ま)ふ(ほ)ノ殿(との)おまへ(ほ)ノ殿(との)
地ひうぐうひきを給(たま)ふ(ほん)ま(ま)ふ(ほ)ノうきうれど・恨(うら)

うくおもうき秋(あき)のれ遊(あそび)ちうと・さうぶれくぐ・こえ
しまちて・そぐれうきうち秋(あき)ちる・秋(あき)の文(ふみ)ひ
ちうしくうちて・男柳(おとこやぎ)
の高響(たかひびき)めぐく・うぐいすのうぐいすの
ぐとのう陰(かげ)ちもしまて・裸(はだか)ちぐいとやうくし
まりけれうう・暁(あかつき)うんのうえうを給(たま)ふ(ほ)ノ
うちれぐありうう・初(はつ)せをすめるやうて・
あうしうす給(たま)ふ・年月のゆくえもちぐぶ(ぶ)ち
をかうぐへちうをう陰(かげ)ていうろ
ぼそくちん・ぼぐく老(おひ)やまうれとうのひうを

三日がほどいでん院(日)ようもあるべきの(添)院ざさまを
いかゝくめづらしやびをのこ(添)ゐいの
うへもことゝもわれてさゞ(添ん)
ありげようようつけてうたゝ(添ん)
好ることもあるまゞにそれど(添ん)
ものみて(廿三ノ)るやうなひえのろひのくるよ(廿ノ添)
まくきけこひそうひのくるよ(廿ノ添)
ちくばさられど(ほと廿ノ)ものほども心(添ん)
いとらうげうされ有る海をいでゝ(添ん)
ものひさゝし始(廿三)姫(廿三)まいばよ(廿ノ添)

ちうこゝろすうちもいつけちされ(廿ノ添)
して(廿ノ添)ひさこちつゞびのみ(廿ノ添)
こゞろのへうひありーなり(廿ノ添)
のこみしのへいうあり(廿ノ添)
こゝろどいあるまゞうあ(廿ノ添)
利まりものこゝちされ(廿ノ添)
行い我れちくうち(廿ノ添)
もあこちこ(廿ノ添)
いよくこゝろーめさ(廿ノ添)
ものふこゝろいこゞくら(廿ノ添)

あんとさひしくこそ。今てとしのくまてもふれ
給つゝさしぐうまこそ
ありくてうく世のうてこと
のいそくあるよ。さひしぐむべき世の有さ海よもあ
ふぐうれべ今うり後もうこそろめうそ
めうさそてれうくまそ
人ぐもおそぐちう世ち
やうちれど。いづくもこれるのれけちひよ。
くうりはぐうさ海まそ
ちくちぐうるものれを
有さ海よけれてもえるう

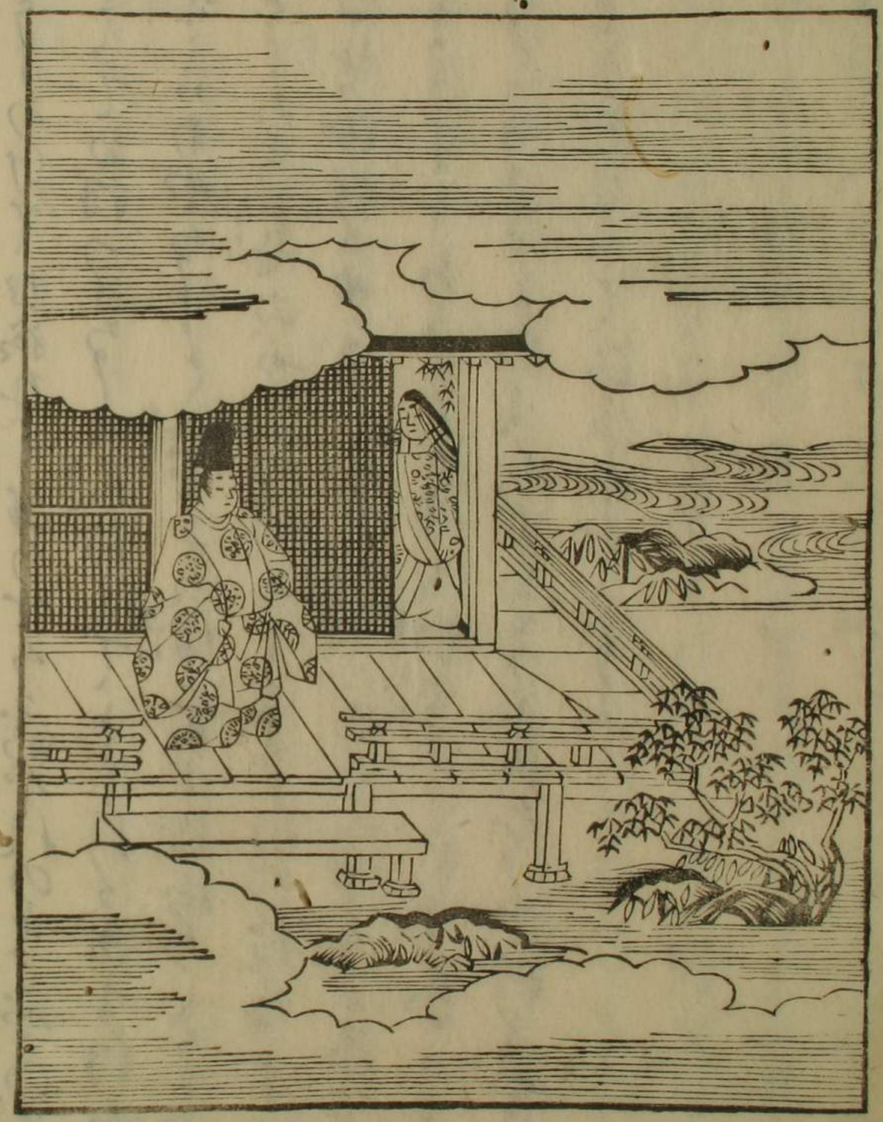
ちうさこそつけてもやすくめうとのおくんめつも
おり必ずづくりそくぐ
そのぐうちうらひちげるっを
こそくめやうっとけうひおくく物被ちぐ結
つ衣うまでおうへのくぐずつひ
ちひうもさこうてばしてくれれ
おまうもあしき給めれどぐ
めしくぐれうさはまをあくずとめちれて。
さうぐくおばしうまこのくやれうく
つうつへくめやをくれをつくへごろのうをめ
まやおくれもむつびそてあしまはしを浪。

あいさつ（挨拶）などやうなることも、人ごとやうなれど、
すゝんでひきうけ、ねぎ事などもする人、まことそこ
ろざしふかくもてなされ、心ばへなどのうつくしげ
なるを、心とゞめてみるに、つゞけ（続）ざまの歌（中務）、中
ぐらゐの人のをかしきほどやうのをぞ、いとよ
くいひつゞけ（続）たる。昔（むかし）の人どもなれど、さし
も、ひきうけ（引受）ていひ出（いだ）したるかたは、さまでこゝろ
ふかくもあらぬ（深き者一元）ぞ、いとよくいひつゞけ（続）たる。
ちかごろの人どもは、中中（中務中将など）こゝろやすきをぞ

よしとしけつ（決）ることゝ、ひきそへ（引添）ていひ（言）なしもて
もてはやす人こそ、なかなか（なまじひ）なることもあるを、
ものゝあはれをもしり、をかしきふしをも、
ことわりをもしりて、人のこゝろをもえ、
ものゝあはれをもしらぬ人こそ、いとおほ
かれ。ものゝあはれをもしり、人のこゝろ
をもえしりぬれば、おのづから、よろづ
のことにふれて、なさけもふかくなり、
すまのまの別のあはれをもしりぬべし。
それをしらぬ人は、いかでか、今もとゞ
まりて、ながき世のうちをもこゝろやり
もなぐさめても、こゝにあるべきことゝ、
しひてこゝろをとゞめおくべきにもあ
らず。さてそのまゝぞそれ（それ）と。

れも人もいのちこそ
おしまれ世のうちとゝもに
けうひ給やうにて おとゝ
くさふくべ おやしらず
あるをなぐさめ我みうきをの
声のそゝろもの給ふ 哥
あるひは やうよちひろ
まこと給れ うちおどろ
ず給ふ 島のひまち出ぬ
ぞ給ふ うそさ出ぬ
ふ給ふ 波
ぬれいぬ みとくうちを
くさふくべ

そ あけて おる給を こなり
こゝてあぼつゝる 名おまで とまれゝられぬ
やこゝいあやちゝと 独ごゝろ
ゝろさをの おとけぢめ
るをおれるゆさと志のび
こゝうしうちくゝる給も
なりつゝるひよ へぐも
まさを給りて ひさわげ
う



まりて、いとゝやまうこゝちせられど、心やすきうへ
にあるじのわらはともわりなめれとさすがにそぐりめと
ぐりこゝちよげにてうちふるまひ、院(ゐん)よりとくとあれば
西(にし)やとおぼえて、院(ゐん)よりこゝちのそんこともつと
めてこのごろりくろうもんとゝをとぢこめられ
わぶれどさはものもひしりこゝちもせず、女房(にようぼう)
こゞしくひつゞけのゝしりけれど何のやうありおは
心うるとこゝろにかゝりおもはせて、家(いへ)のかたよりかこと
のごとくおこせたるをみるにいとゞ
物(もの)ごとよりこゞしげもるさはやかなれど、
るゞひきつくろひてそ

(清汲) 女三を十ふくろう
ゆり名、姿といとうつくしう
(姿を揚ようへて)
揚ようしてかゝりてかゝれもあるまじきものの名
めとまうすやあらん、茎の(さう)
の名よ(三ノ)
ふりあり、紅のう
すつまれうを(清ム)むしやくとい
ふ、(清ム)さうはすくなをなごでおも
どおもくもちやうるんの(清ム)人の(清ム)さうごけ
るとなびすよひさうくしう清もろもろ
のふべくれどいとうつくしきちげるり。
(清ム)さうとてそひろげるとりめるえ
ふ
(清ム)さうとてそひろげるとりめるえ

三六

ふ茎のあいやれるよげよいと(清ム)さうごで消べき風よさご
(清ム)さうの行よ如めるく人いとつくありちげるり。
と名とまれどくいなをめもよを
(清ム)さうく人のうへるふべさてやこまめ。
のべくれどいとうつくしう心やすくをひる
人とのこころし給ふ(清ム地)ふ(三六)家の作方よひふつくり
めふ心ことちけさうしどのへくれありき夜いま
こなう如房などいまそこ
さもあらんうれみとろひありやくれもひ
人ぐぞいでやこのれ有給(清ム)ひとあこそめでこけれ。

（廿三のおくそひ話ども）

（源氏女三ノ秩）

そむくせのうちのめくらさるごくいきりごとさほどに
をもあてけなるれそおもひ
かのごとくよほそらるがそうへて行まめ
ちどのいとめでうさせ院れんじておもふことも
そづーげるあるよいけをくてこしら
んこくいとこころうーうばしーうり今ハとて女
更ておちるどをのがこつくはれのみも哀ちうこと
ちんのおりけり内約のうんのささいの
家のおりーまーく二条の家ちそすこ結ひめ家ち
れこををそそいぶれこととちんこうこごちり
こうじもそそーうりけりおまよあるりちんとばし

えれどうこをひまはちうやうよ心あはあく
ーというあて、やうく仏のれこともどいそがせ
うまふ六条のおとくハ家ちあるのこばしーて、
やこうーれおうるれがさーうんおりよ射面おうん今一夜ありひこそ、そのそれ
こともこうしまはーくのこばしーつるをうこ
ま世のこうこもこそでうりのべさちのほどよいと
おーげるーせのさはぶさるごとも、おばし平こう
れがうりけよつこうーまひけるをうりのど
やうよ女ちて世中をうひこづまりおうんれはひの
は有信、つよくゆうーく忘許るのれがおうまでる

あれど、おごりしもあれが今もけぎ
やうまうまうて、うつゝのべうやとおぼ
ぶれもりをのうべうて、給ふぞ。源氏の
院よ初すき侍のあの日びうづひて、ひさしく
吹よけうを始さはぐうちぐけぎやうまつうくも
つとおぼしそうちんひうちぐけぎやうまつうくも
びんうち我のうよ
よもうくうもうをびてとうなもひ給ふ人
けうううを伺いうくうろ
しとこのて、さひめうを給ふともあれど、姫君のれ

ことの後いかがもつとすぐあうるのやうには
あらずそうへぐうう心そひて、ううめやうまそ
おうす。その日いうん参へも海り給ぞ。れあうさ
うう給うう給ふ初ちぐうよ心を
うそて、むつまうう人の限空よ人うおぐろ車の
昔おぼしてやつれうそのぞふぐうのみ
てれをうそてまうくつうおりまし
うううそのうさまのそおやう
いうやうまうまうへぐおうう
やうそへうをんうゆえとして、
あれごうさひのぐうそれをうれとうひ

ちぐさのてぐるまもとゝめてもさゝ
昔のあっまでさゝちどいはぬ
けりちくさのへだいくちぎくねざりむすへ
つゝさればよろけぢうとはとりはでさるう
ふるさびるけちゝめれこゝろさられば表も
すゝうゝぶひんぐのあ二条の天つ水討べ歌のかたおこ基ちるけうとふこの
くるのひうゝすへなうてゝゝゝのそうも
るめられだいとわやるうこちもそうれ
年月のりをもまぐれちくゝへうゝ心
ちるひょうくぬめうゝさいうゝうくうそと恨
ぎしかふ表いうくゝ文り

こゝぐちど表ゝ年てゝこめぐくと人えすくちさ
家のうちの有様ゝさもうりせられとおばし
でうちよ。ねいぢうがまれちられどまとろ洞
もちゝもん。昔ようりてゝおとおくしくゝ
招もれうゝれをうくてやとひさうごうのみ
年月をゆま備てあこはのさゝをそぐく
おつるちぐさ
洞のこさゝめぐくゝ水そりのみ
そわく絶ゝさちどけちられゝへどゝへ
をばゝいづるもられゝようゝいうゝ
こゝもおうゝせのさゝぞと。その出給ゝぐ

今一さびの對面もすべうもあらぬ
ものをもとくうらぶ
へのさまざまいさゝかめぐみ世中をさひそうそ
うもてやうくおけつゝのことゝもあれ
つゝ歎まうくおぼしつゞけられ對面うれ
しく昔おぼしうれ對面
うめ心ちもそえ心づう
らうくしくつゝうちう
のつゝまうをゝ衣ともさひこぐれて鈹さだら
ぬ地しおうそうそどめうこんうりも
消えづゝく衣ゝおけゆくまゝにおうそ

おうん元年おさぼ
ちぎりのこゝもいくうちう
ゝて名おうすめう楢のおさ
もゝしびのくちうそん
月の殘るけう初もそのありのくうさでけ
あれこ地さう中納言のの
妻子ゝおけうよ立うりて此の君よいう
深けんおうよう祝えうそおひよこそいう
でうこのげいさちうおうくそ
ぐでうそうやすひさ
日のうやうこゝ

あるさせよりけて（ママ）ぞ給（賜）へんの去のかとしもおもふ
ありすべきあれどいつへのことまつり（添）まほしまほしきはおほどほどに拠（据）てまもつかりける對面
ちん・ありあるこちすつ・つぞひとめとぢめあるか
まづくまてくくてそ・いまこそびもとくこと
きこそ給（賜）うちわひてそ今めくもかへ人のほど・事ぞ
あり・薄れ・昔を今のあるくとそ・さすがに泪ぐこみ
事のこのいとらうたげ（添）心やすくめ
ものこのいとらうたげ（添）心やすくめ
れくきこそふるひきつこと
るどてをへくまへ・隣（となり）あるべくもあるつ

きこそめとぶそぞまこそ
ふるげよかとろとり給（賜）ひけれどそ
給（賜）ひず・女のかた（添ノ）ふるえわろり給（賜）ひ
ぶーさめをかうしろそ・やもそうず
こてけりづりうぶ（添ノ）
そおるまして心ぐるうべき紙・おひらる
うけてきまてあそびこそひこそてまへ・
きりつぶのかた（吸ノ）いうちもへえまで給つず・れいと
まれ・有ぐるれが心やすくるひうまへりわ（吸ノ）ふれ
そろよ・ふとろくのこばしろ・えごろあや

をも（それ）男（女三ノ巻ノ六）など、中納言（女三ノ巻ノ六）のの
どくぐしを男（女三ノ巻ノ六）ゆれがうごけ（女三ノ巻ノ六）ども、
さ（女三ノ巻ノ六）ばかりこそすれど、いと
ありいうとうず。（柏木ノ巻ノ六）あるさまぞ
うつくしげなるも（柏木ノ巻ノ六）、ねこ
おぼろけ（柏木ノ巻ノ六）ならずもて
ありく（柏木ノ巻ノ六）ものを、（女三ノ巻ノ六）いかで
うつくしげなる（柏木ノ巻ノ六）ものを、
うへ（女三ノ巻ノ六）のこころひけもらで
ゆゑ（柏木ノ巻ノ六）ぐくしくもてなされ
ありきたまふ（柏木ノ巻ノ六）ものを、
ことにふれて（柏木ノ巻ノ六）、
うへ（女三ノ巻ノ六）のこころひけもらで
ゆゑ（柏木ノ巻ノ六）ぐくしくもてなされ
ありきたまふ（柏木ノ巻ノ六）ものを、
ことにふれて（柏木ノ巻ノ六）、

のべくそ（柏木ノ巻ノ六）ありし。うらく
なる（柏木ノ巻ノ六）ほどもいとくろ（柏木ノ巻ノ六）
そこのちいつぐでとのこ
てもぐ（柏木ノ巻ノ六）ぬちんうち
らうをとりびろけそ
のべくおもほのことひおも
やうこそ（女三ノ巻ノ六）のへばげ（女三ノ巻ノ六）いと
ゐれとおさされこちと
のちいつれなこそ
あそびるぐつけて
給世中の人もおのうの

王經金剛般若等念誦ちどいとゆゞけされ彼岸や
上遂ついとなく新築のう
いもんるちく新築のう
もづめて、これもあるよ
のふもあるべし、おがれ口
車のりちぶふをとちばし
我もくと、れうぐのごろう、ずさやう
をれ年尺の日よて、この院いうく、すさ院もく
つぐひうまへうちよ、我れつろうの母よりぼく
二条院そのれまうけいをさ在されさうぐくを
もづめ、さるのぐもぐ、これさるうのこ

のりへづくなばすく、れ如ばしつとこのう
びのやうは如をとうぐ、すろういをうもぐく
ひけうを今すうーうさ心ざーぐてもも
ものさるさ而あるをそれるつけてもまさやをくず
ふんぐあうくげるくさへさそしうもく
のへべくるをそめやすくもんるけ、神を月1
基のうへ院のれ変よ、さぐ皆れ堂ろて、菜所
仏供養ーなり給いあーさとい、ちよいさも
よのへばのびやうよばーまてろ、仏法
ぐさこちのらくのへばまとの極楽でひやーう完勝

つうどやうなど笑て。日ごろ言うる程よ。こ面のらん
ふやうーて。らくそんのまひ出うる程ぐれつるの
めもれめまひのさ面もとれば。まひもうる程ぐよ。拍
中納言。湧つ時ありて。ひりあやをはのるままて。
記集のうげよ入めうみ彩。あうずりうありと人ぐ
ばーうて

いそうへの寺座院のいり（江ノ島の異名）がたより。青海波（せいかいは）のいそべ。
うらうら夕（ゆふべ）凪（なぎ）ぬひ出（いで）給（たま）へるに。月（つき）清（きよ）く指（さし）出（いで）給（たま）ひて。
のまをとらず立つづき。さゝ波（なみ）うつ。せゝのおばし
有様（ありさま）ゝゝいとゞ
ゝねいやすゝゝとそゝのかし給（たま）へるに。ゝゝの和（やはら）
ぞへて。ちをさゝべさまして。昔（むかし）うゝゝちつゞき
ゝれちゝひとめでゝゝゝふ。おゝぢの
院（源ん）も袁（袁）も涙（なみだ）ぐましく。ゝ生（せい）ゝゝとぞ物（もの）
う。我（われ）よりて。ふゝべ。
別（わか）ゝと。人（ひと）ごゝろもうつろひ。ふの改（あらた）乃
ひゞびづゝとりて。ちゝのゝひつまうて。
ひゞびづゝとりて。つゞくゝまふ。ちうさ地（ぢ）ど紙

ゝれぐゝづゝそ。山ぶ（ぢ）池のつゝみうち程の
ゝそめか寺をうれてあそぶ。露（つゆ）のも衣（ころも）なひ
ぶべゝゝ。ゝれおそびもぢ
ゝゝれゝゝぐもぢ芸（げい）家（か）うゝ
集（あつ）座院よりつゝうまいわれうびもゝん（琴）ゝ（冷）ゝ語（かた）りう
めへるゝゝのゝゝぐゝれ昔（むかし）ばしゝうものくれ
ゝともゝそゝめづゝゝくうゝ。ゝ（ほん）のの
ゝりまもうゝすのゝれありさ様（やう）ちつうちぐ
ゝばゝいぐゝう。右（みぎ）のゝ（なづ）文（ふみ）をまゝうばゝうゝ
ゝゝ装（よそ）ちど。ゝそゝすゝそゝつ
まつゞてゝゝいゝうざゝをよゝなりけんとおぼ。

ちくやうよ抱しめ給まもれ（守）我方の伊勢の
家にて夫との恨（うらみ）
をくせどそのかひもなくて
けるその日のれいさうぞく（衣裳）
ちんーのひけ（袴）ど
家の小方（こがた）もいそぎ給めりし
いとうつくしうちくの抱
さぶらひそのことよの
つけてはゞかりもまれ
給いまゝとゞまりしを（ため）夫の
いとうつくしげまへ（前）られ
つゞのれ（着）ちごうつくしげ
そなりしかば（ゆゑ）月頃ほり
もる我（子）もちぜんとり（膳取）
てうぶうぶ（初）ほどれ
ばーもうでさせ（詣）
まゝめいちゞ（乳母）
ばさゝまゝ（まゝ）いと
おえんとうそ（うそ）おば（乳母）
ーと（戸）ぐ二月（ふたつき）
より（より）おやちく（ちご）色（いろ）
ども（ども）ささぐべー（捧ぐべし）汤（ゆ）
ーこのべくされ（ぶ）

なげつるてそ。みあ
基こつてもり給ふ
みさけらてごもちんめ
ぶんのまるくめりて。いつ
のころむ(名)ゑこの時そ
りつすくもしこゆべき
ひざもあれいくてき心
今いこよるさかげべくそ
さ面をこまう(尼ゞノ)ゆ(名)の心ち
ちづきもれなそ。そ(名)ゑいうそのふ
らひのへい。昔のしちぐ
給いざりけるさ。心(咲)おまゑ

てい(く)涙ぐちよ。あるめ
出つくるもおや(名)(名形ム)和つく
さ人れとうちまもり給
ぎりいはのさくをさ
多へう。む(名)(尼ゞ)まれのひ(咲)ほど(源)のこと(名)の
浦よおりまうしうし
のぼり給しまされもく心をまどりて今いとて家へ
なりのなりこそいあ
おのくひさすけのへ
ふるれすくさそいてく
ふるさくゆろくちけばげ(名形ム)ま
昔のこくをくろをざ

ぞりこれど、まこの
こりおあるこそ
光の治ひあり
治こうぐめん昔のせ
ゆうされてうん物打
こぐやこ面の名やを
こうこまをぐ、おぐ
晩のこも、美のこち
却こもあり打こる

ほぐこいこよむまれのあてかごろく
しくおぐしこぐいこるやこおこも
るこおこここまこ
面こて、おこぐもれ心ちるへおうすれぐ根るくなぼを
の方こて、こぐ打ごこ程ちよいこあしこれうぶ
やしちひおぐのうちまこりひぐこうこ打ちる指、
げるひあうこと、尼者のこあよいこしこれど、
ぐしこまこやうるれぐつくり治ちん、そ、墓の
うへもつくりのこうまこれうぐくこおて、人の
祝のこそ、ワこをつこ
却こうぐこそ治ぐ、人のうへ、

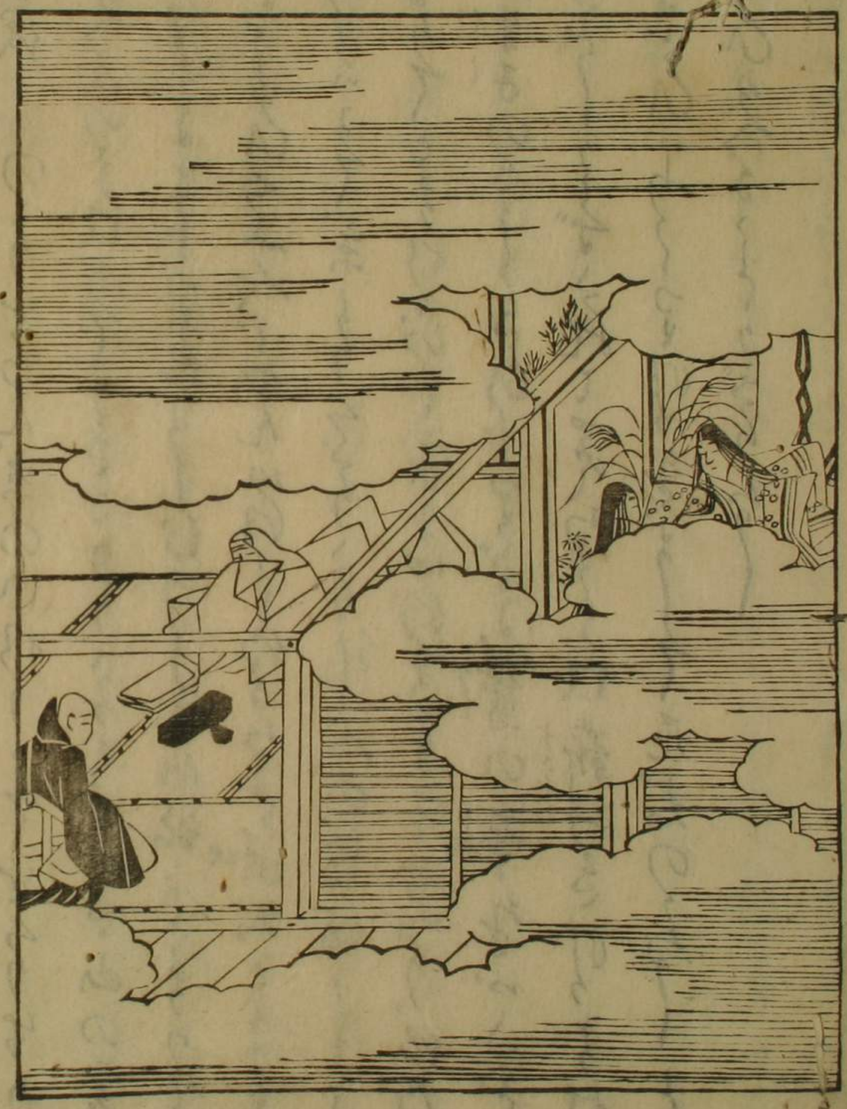
ぬちどやうの物にこれそのものとも至て、この
園のむくの葉よ、人もとひごくみさ山あるを
うしごろもをきちどうこうこもりちん
のち、まるひうそ付こしもうべきよあごぜと
そひてごすうごぜうありそればいつま
までもごへうを、今ハ
よてちんうひけうこのちうさうごろうり
てい帝ことちうてひともうつまら
ざりつこれうりごごうぜ給人ごうりけけてちん、
一ごうそも、おまえまうべきおうのことを
うひけう心うるうせのとちめるよごうそれ梁

うるなれるへりこのうごびいおるで世中去
うちよがごひつれごちよういうくちるう分を
入うやうよみまへちけうこうちうさ
恨いそそうけう後うごれごそへるもめれ
いとまりて、念仏もけごいすやうよやくちうて
ちんれをそこもまうをつてようけ給うれご、
若ごい善ごよ系のて、おとこ家生れのうちを
ちん、ゆく候ゆへいごごうくつるちる
山ごの男よ、今更よこそれのうえをうみよも
ゆごごうて日の年ば心ごうく六はの行とめ
ももごれことをうて蓮の上のつも乃、

わづかそこ〳〵もてるえわ
むまれなんとそ〳〵そのこ
〳〵やう〳〵ずつ〳〵すこの山
山のたゝう月日のえさ
てく〳〵す〳〵づ〳〵心のそこ
えまあく〳〵ず山をべひうさ
さゝまのりて雨の方
物ー美そて
ぞ〳〵そるず〳〵何ごとつけ
〳〵をべ物ぞん心のう
ろそ〳〵まれ

んこのひとつのこひうらせよろひねめれごろ
まよりての方十万億のむこぞてろれぬのうへも
のぞこうるびちくぬ仏めれ今いくむうみう
蓮を行行る程その夕まで行きこうさやまの末
うそひよあ仏ろんとうてちんうりりめろ
入通ひろりぞん曉ちらくぬまろ今ぞてうよの
ゆめぐうすうとて月日ろろろ令改らん月日も
さろおろてめそいうへろ人へのその重
けう衣よもおろうやれまぐ現身変化乃
もれとうてうて光法一のろめよは功徳を
つろりへびまろへてもう法世を忘れ

ろふかねびけうろいうぐろけるば必ろ
對面けりちんさばのれのろてうよいて
あひえんとをおぼをさてろれ社ろそけうめろ
乳文ぞをおろちぐちんのぬぞこよむじ
こめてなりのへう。おもぐこの月の十日ちんまのけをまろを
ろれて。ろさ山ろへ仏めろひるろ方をびう尚
ねろこよもう仏りちんそこう只れやひしやう
ある乱世をもち出ろろろあてまろ
對面いありちんとのこ尼ぞひやこそてれ
つひの大法ろへびひ文云ろて。二日といろ



（名刀）あらうそやいつまであ
心ある（ひよつ）と（ふ）
こそ（ほど）（ふ）
けられそ（ふ）
ぶさの（ふ）
岩（ふえ）
乳（ぢん）
（ふ）
今いつ（ふ）
（ほん）
いう（ふ）

こころのうぢめ
世中（ふ）
（ふ）
おもこのせ
そらだ
あり（ふ）
（ふ）
うひすこ
ぐ（ふ）
やすき
の（名刀）

山はとくちん哭ゆるとゆれいさゝがそのゆいぞみ
るくをおそうそこいくとうそうろう治や尼ぶいうそう心
ばくんおやこの中よりもべうそ海の琴もくるま
こそやうべそれとそてうち明ぐこまへうぐこの
もりよせ中のありさ海をとくなひもりゆく
まくよおやしくゑくさの半ふくへ去れありり衣
海なればふうさちぐさりのあるくひというり衣
るんあぐのくまふのいぞよび美ぐうもばし
あうずうくまやとやそいくおやさぐんじ
とういやうるおとくよもべめれどゆうんじと
ぐもべさうくまやまぐ今いとそ

別うくぐれとてあうれいありゆうれもりそれ
そ海うくうちるさ絡りのそいくうくく
るをはれぐーうずもつぐとうのくまこそあうべそれなぐも
人のさぐぶせふるさのこそすくるりぐ記
それそれ祝のおとくいうくこそありぐる
こうぐをつくそおやけうまもの落
けう程よまくぐひめりそれむうのように
すいるさりぐくひとりをぶのよ
ぐこうけれどくとつざなくとふ
べそのまくめそこのさうひのさるくこ

ことハわしめなれバ涙をしのび給ひてその義の
わかきめとしめ給ひおやたちくひがくしくすゞろ
まうさき心ざしありし人もとがめまうされなバも
さうまじきかたまひをかりてもすかされともひ
しことにこの志の生れ給しけまちがひかく
もひたりうしかどもみまんにこゝろあるきことに
おぼつかなくてそのひかりつれさしばらくぶ
のこまでおなぢうまはのぞこしおりそりなこ
さ後はいろきめをこゝろびしもび人ひとりの
こゝまでそてまくれつかするれむろにせこて
けんともゆかしかれバ心のうちをおかごころくとり

給つうれハまつさぐりてはかなべき事の給り今まで
きこてしたしを給んと女のまは男の給ひまつゐでゝ
いまはくわうしへのこともおなじようりなひぬ
れバおなかとの心ざし人をそうつにおばしなすな
まとうりさるべき中ゆゑしめむつびよりもなほ
さ後の人のなげの義をもけひとことめころさを
あつハおぼろけのことにもあしぞましてこゝに
なぎまつくひなれ給をいろくもなじめれこゝろ
ざしうちしげふかくわんバにおもひそこてころを
いにしへの世のくとくにまもさこそもうそべりハ
もぐさミげられどもうかりしきこゝろわんま

りこそやうられど・あやまりても・ワがこ
継母ら
もるのこころゆゑこそ・
ちうこんこころへ人をこそひうこばう
ちうこんこころへしのこころ
こはとつこえぐりこそ
べ・なばろけの音のせのあごもこともあろ
みぐもあれど・ひこそりくつこもこときはをの
づくもそもこをこうこもあるべんめりこそ
もあうまじこそこよ・ぐくくをつけあい
ぎやうもく人をまてこそ・ひうちあふこいこうち
とけぐくこそひぐはちうこワごよちんあるべき
なはらはあれど・人の心のこあうこ汤こをこと

むこをこうよゆへうこいこひこ汤ぐこうちあ
うこめこそこのこころぐ汤こせあるべありこれをのく
えろろうこありて・こうこ有ちくもあるものどまるこさう
こそ・ワぐうちろこそ・まめくしくえこひ
あもこんこいありぐこワごこちん・ぐまこのこ
こころのこをうくこそこいこの蚤(虫)をのこちん・これ
こそでおひくこちろ人へこいうべうりけふこちん
こひはろ・ふこそこあまりひくこそ・これもしげ
ちこさもいくこちもの・やこづりの活(名をのの)こり・こへこ
人ぐいこひやこれめこ・(綺麗)こそこすこものく
心こそ・ねこ・活こうをいこうくむこびこそこそ・

このれうろこをもおちるまで心そそいでおしへあるに
おのびやうのみの給もそれといとありがたく
ぬくもりをこそそそいでまもりつゝ明暮のともしらさ
そこしおもひやりぬ陰にさもあれよおばしゆの
さびらんまでゆくすえをかけてそのうつくしきを
あかめをこそいつさまでもずまへのこ陰もそ
れがくりていまだゆくさきもあんぐをこゝろ
さすがにそこめそれさへ
つまくおもふのへくをけうとうをこゝろ
そうくされなうてのこゝろそこゝろそのみへで
れうこいはのの心ざしこのれあり

さ陰をうちまもりてもおえそこゝろなめなが
ゆづりこそこゝろくちもめれもまさりもちて
けちえんよちびおしめやすくちもれもひちく
こちれめのやすくちもれだいとちんなひちく
うもてさそちもさこゝろそもれ心そてびく
しさひとはそちまでらふこつけて人のこあさえ
うこさこおりうしそてもそ一でるく泊も拍し給
めれば心やすくちんとのの給こつけてまさりやうく
こそひぜ一これちどおもひけこまふ藍へ
つうおめさもいとやんぐとちされ心ぐこのこ
さそろめうれげこそくしこと

ぐしめくりおりさ海のこと
こそでこれ(註三)ぬのれうべのれうぐさ
のこめでくて・つくりぬもえもえもえぬめもえぬさ
ぬいうぐけるさつぬりうぐ(註三と誤)おもぐすぐ
ま兵かすれどつま一ささくぬぐくくもりぬ
うぐちまま話こつけてもつぐくをけいとくけ
ぐでそし話けのやんぐぬもぐさぬぬぬぬぬ
あぐざめる世ま・まくてそちまぐべさおぼしうぐ
あぐびぐべて今いうぐくぬもぐぬぐ
みそしこもりまくも(入道くも)やまぐさをちひやるのこそ
気をおぼもあさ尼ぎもぐぬぐちれそのこれ

まさてもあさおりぐ・ひとことをおこそ後の
世さちひやりつちぐめおぬり大(タイ)おのもを比(註三)妃
なのれこをちひをちぐめうもあぐうぐ
尺めちくおりまをいとうぐもおぼ
えぐ・さうぬのれうぐ(註三)ぬさまぬぬ
さりめぐさおりくまれぬぐうけひ
有給もま話こいとくおぼとき入こ一そぢ
まそ・うへのぐさいぬめくせのまぬこれ
ぐりもてうぐさをへれどおさくげぐや
うまれめくいこぐ・ぐおとめくく
さいすくる・ワやうちひとれひこ

みつよりうちうるわざされだめるいとなくぐぶ
ちつめまでのびひさ・あ
れめうちけいひちげ・ちつげちう
心そびめうろいうろのうちのあるいうもうそめ
ワざれび・ま3人ちそひうそんもまる
さうころちゆさげよびぐほりちべうそ
もうちまびれびうろへの人よひれうおうげ
けうひまでるーよちぐうまうをぶ明れい
いうびうろれあうそびうれ心いれうコうべ
のおりう風ちぐ・僕いいとめようつざうみふうぶを
あれど・び・ま風こ世中をばしの給うめれ

おびちればうろうをもまうそそそそめる
まはしうろめとめうぐゆうしめいまうめ
とうの人さを給つぶ・芸
をぶぶとうくをうへこそそ給ようずうまそつけ
ゆへうおうのうち紙タおの表もげこそ脊ぐうさ
世ちりうれ・芸のれうういうこれこうのうう
へめれど・そもうく・もちりでこ笑うおく
ちびやちる紙もうくしてさずる心うめうう
人をもけさず男をもやんごとなく心ままてもて
ちーうへの人へうくさ・こ理そそタおもげもこぐうそ
のうちん・そひ野れけ・つぐれ小方も表とばぼそ

まことやうれしかりけるひとの
もとさぶらひなどいひてかへりぬ
めるをきゝつけてこゝろゆくびて
ゆくゑもあらぬ海どもをよろづ
ひとにおもはれがほにいひ
ほどをもみるも退屈く心こゝろ
つきこゝろもとなくさうざうし
こゝとゝなりぬるやと心うご
あるにはどこなりありるんやと家もとく
給ふり迷(拍ふり地)のんのこゝもと(六字ノ)
まふいち(拍)人あれば(女三)文をもちて(拍)
こうしたあるにもうしれこゝろをゝてちどこは
しくこゝなりをゝて(拍)さ海づ
此ほひとり(拍)雲(拍)より(本)院よ
のこゝ海こせずとまつ(拍)
へろはつ(拍)くなよいつこゝろもそれでちを
えこゝひこゝろれずそのありこゝろ
女三)女房のこゝりこれ首(女三)ちどもまつこゝろを(女三)ぐ
さあるにもつぞこゝもりけこゝ
ひこゝは(女三)ちゝをれのそあるんと世人をもびけ
こゝあこゝてこゝろとこゝもよし
こゝをなこゝぐこゝひこゝをれ(女三)こゝそ

あくしざしめとつねまこの小侍従とりふれちめし
ともびひきげましてせ中さゞのあきを物かたりの志
まとうりはいありて。物語しをきそてうるうまゐとも
ひき給ふもどともゐくちゑく思ひありてまけてき三月
ちりのをそうちてちあるうる日六条院に螢兵部卿宮。柏木
あど衆のへり。物かたりせめて。此物語あとし給ふ静
おろすまねへこの代にそいとつれぐにまさるる
こしあるりられ。物語やけわるらしまことありや。源
わざしてくわらへすへきあまゞのおひそてげさ大将の
むれしつるへりぶ方まぞ。いとさうぐしきに紙。
御のこゆくこゆきをそこうんべりそりこのむめる

わりぶ我がまうしつる紙わくうりぞやしめると
ともおも給。大将の悉いうしうくのまちよ人であまる
して。まりまておそむしてこ給とふきそしめ候。
こぶりがきしきとのぶすずゞめさあてうぐく
ちうきぞうし。いづうしあるまとて此きうそこあれば。
まりのへり。若君達めく人ぞ物語りそり。まりもる
せのへりや。あれくかしつるとのるまうふ。これ
これ侍り川ぶちまうへまゞでんやとの給て。志ん殿志
ひうじおりそ。きりつぶもわくをやぐしけりて余
給ひし汁ちれば。こおるいくくるへうりそう。やアも水
あどのゆきさあひもあれてよしあるうりのほどに紙

かくてうちわびかの御いとみて。志遮。弘ノ弁。
長楽ノ佐。大史の志なりしかも又たなりたりも
さ海ぐまゝ人よりまさりてこの枕しのふやすく
菖ゐるまゝをかなしうきさ自ありとけしぞて。
弁ノ志もえしづめず云ましれば、かとも弁官もえかさ
めあへざるを。遊ありともげにさ宰府げくさ
うちわびながらこぼれ給ふがゝんかすりのまゝうひ
まそでは。あやしくこゝろす。口をしく拍しくしてわざ
ありざるはいつとなやうくなりやこのこゝとの海
かなどのとまるまゝ大ねもくれの志もこれおりのそ。
えなたかなる粗のなげまさ海よひのうだ地かんへいと

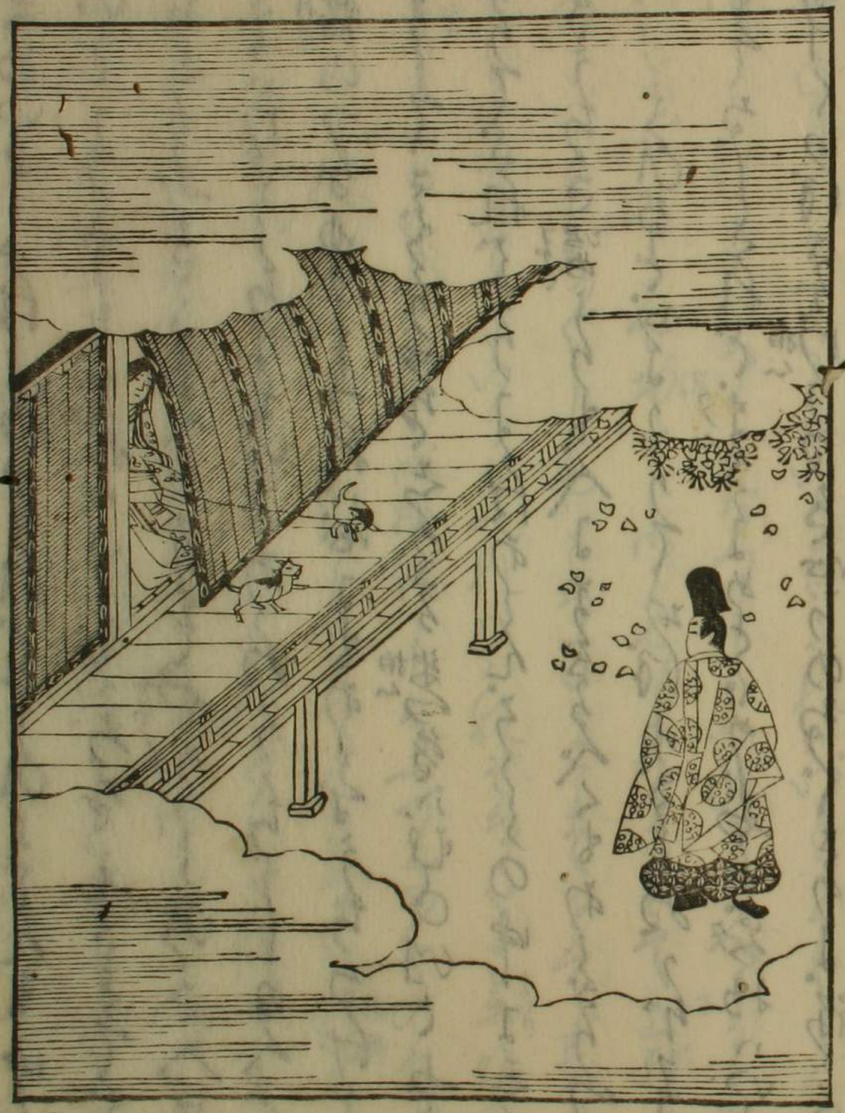
云ゐげあり。おもさく海よく。志げならしぬこぶれ
ごとおれど。ありし人がしありかり。ゆへわか庵乃
末云のいろくみすこゝろなきま。色々のひをとゝは
ゆく茶の来ぎ。ひづある由え寺のなげりけり。く
ちるまさことあれど。うきあはきけぢ光わら紙
いづくして。我もをらしとおもひがへなる中子。
出つ縁のありそめようちなまでのへ家あしもとよ。
哀ふ人なりぞうちつとそうなげにち海めき
うかさ海志ある人の形さいふくして。さすぞり
こそりがらしきおりしく。心ざしのまゝわる
袖桜のなげまちて。人ども真れし人もなぞ心る

つれうを(涼)おくるも(雀)なもすこのうらんよ野てから
んとでうくうあるこころもこえてうぐひすの
ありゆくよふらうもこぐらうちのひとこ
すこうろざうたぬのあもの(伝)のほど切のよ
そ例をめこぐりぐこれとはばゆれうる
めへうけるつくおてく桜のうをこの
やるへうるさこめうれすそのうるすこ
おくこて気色でうのさあげめへうぐうぐくも
こぐまれこうげるうらけすぐこうれ乃
ゆさのやうよおうこれどうくあげてだれ
うおすこをとおりそこのうれうれ乃

ゆぐよおのめ(拍)れの志つぐこて(芸)ぐうりくく
ちうめりやさくくふようぞそ
京(廿二)のれ前のうをちりめうこ
かさまこめけこひだもそぐこれ出るうよ乃
つまぐすこうげをぐうれもけれめさがくろ
まやとおのゆ出手ぐもちぐけるくひうあて
へげちくうこてぞうこ猫(廿三)のくちい
さくおこげるれをすこ猫(廿四)のをの
つこて例(よう)こうれつまよおうも出ろ出へぐ
そびえこそぐそよくとうぐろさ海うよ
けこひぐこそこめのうちひこうこまこさ出る。

猫(ねこ)いかるくく人(ひと)ともちうやつてくる
つさゝりけるをみて。のさ
よげんとのうつろわれよ。こゝろ
のさおげれうをとゝろ人(ひと)もある。
この枝(えだ)のもとくあうつ人(ひと)ども
そて。かれをとゝろけうひどもとり。手のさは
すうつろうわよ。うちさすぐそてうちの人(ひと)
人(ひと)あうとうつうつの二のまれのうぐ
ちれいかゞれ有もつくおう
むいやわんこさうみるさ
あうろうけちあゝろやる。打依(うつよ)のつまのやうこ

えて。猫のおり地のほそるべれ〳〵のすそまで
けぢやうこあういとをりみうやうるびて。す
そのふさやうそれうういとうつうばて。七八寸(すん)ぢ
あゝりのくれそのすそぢち。いとほそくさやうて。
すぐつさゝこのうりのくろそだめ。ひちずのてう
らうげるり。夕げればさやるず。おくうさ心
ちするもいとおぢくちおまうこ方をるぢう
あゐ道のそのちをおこゝもめへめ色ぜをこう
とて。人ぢあうをふともそうけめるべし。猫(ねこ)のい
くるけぢ女三(をみな)こうのへうおもちもてるいと
おひうそて。つくうりうの人やとふとこうう



（夕ム）大将いとかたはらいたけれど、はひよらんも中く
いとかろぐしければ、たゞ心をえさせてう
ちしはぶきたまへるにぞ。やをら（女三ノ）ひき入給
さるハわがこゝちにもいとあかぬこゝちしたまへど。
猫（ねこ）のつなゆるしつれば心にもあらずうちなげかる。
ましてさばかり心をしめたる（拍ム）衛門督ハむねふとふた
がりて。たればかりにかはあらん、こゝらの中にしる
きうちき姿（すがた）よりも。人にまぎるべくもあらざりつ
る御けはひなど心にかゝりておぼゆ。さらぬかほに
もてなしたれど。（夕ム）まさにめとゞめじやと。大将はいと
おしくおぼさる。（拍ム）わりなき心ちのなぐさめに。猫を

まねきよせてかきいだきたれば。いとかうばしくて。
らうたげにうちなくも。なつかしくおもひよそへらるゝぞ。
すきぐしきや。（源）おとゞ御らんじおこせて。（詞）上達部
のざいとかろぐしや。こなたにこそとて。對乃
みなみおもてにいり給へれば。みなそなたに参（まゐり）給ぬ。
（蛍）宮もゐなほり給ひて。御物語し給ふ。つぎぐの殿上
人ハすのこにわらふだめして。わざとなく。椿餅（つばいもちひ）
梨（なし）柑子（かうじ）やうのものども。さまぐにはこのふ
たどもにとりまぜつゝあるを。わかき人ぐそ
ぼれとりくふ。さるべきからものばかりして
かはらけまいる。（拍ム）衛門督はいといたくおもひしめりて。

やくまもすれいさるれまろうめをつけてゐるぞめやろ。
なむ　なむ
なれいい心ちろうこ・おやしこうりめるこすれするそげ。
拍　拍
ちひ生ることやわんとさ・いとも一ぢるりつ
有程を・ついろぐしーとそうんうーぞや
ゆ　ゆ
ろのれありさ風のそ代あるまでありち地をと
物ようれいごそせのものばしの程よりもうち
うちのれ心ぞーめるそやうまたありれとこひ
あってそ・れうちとの見さおろぞ・ゆけあるさい
らうさそやうれどうろめそやうりやと
ちひおとろうんのれいろげのつをもおさ
おさぬどれず・ゆ地のまろはのうまも。

それとこまうつまも我音ろうの心ざーのろーある
ゆ　ゆ
べそそやと・笑うれーさ心ちしてあずのこそも。
ゆ　ゆ
悦い音物代そのでめのそ・ろげのろぐめーおし
ろるろちるこびそ・うちまけのろぐめーおし
中こ・まうちんえをこぞずちりろさことい
つえあうまでれど・拍のすぢもちをこまりり
ろうとめをこづず・うろこそそれとれと
拍　河
のの人げうちゆーろこそ・たろぐーろさまた
めくゆろ・家のぞのさーもつえんゆんて。
後のせのこめこるこそめべれと。
ゆ　ゆ
ゆへげ・ゆでうなげぢめ人こをなけぢめ

をぐらやま　つくもがみ　あかのうらへ　ちぐさ
うらとぐめいれんこんこそけういあくえちぐさ
みれおかやま夜のもひやうしきをまもる
もうろう（狗心）へよちろのてまう心を
うつもへいもれー治うんなぐまつけてう（芸）衣と
そゆうーのみぐろういちぐびうーそそめべきとひ
めぐーすよいとこそそるくれあろうろうるべき
月のほどもとひきこうられいひのこおろうて
まうでのめ（夕）えれびとりの車よてたの行地行し
のふ（狗司）行けばのうれぐうけ山（院）よまりてまうぐう
うすべきちろうろうみれやうちんいとまれひま

まちつけて　芸（法）のありすぐまいれとの給うを
芸ありこそぐ月のうをのくつたのの行
のへとろひちぐろおしーのて　芸（狗心）のゆうこ
物行（法狗司）院ろ尺れこの芸（芸）よのをおありるれ
れそくのとちろあうーこの芸（芸）いうりなへる
すんそぐのちびちるうてまりなへる
さもあぐうんこそ心ぐうれと
あのるくいへぐ（夕司）なぐうはそのへふー
あんこ（法）ろそ夜うてあんこそぐうは
むびのそぐあむうこそのべあれ芸（芸）をば

ろづづこつけて・いとやんごとなく・ゆゑびとそこ
あへるを・れをとりもちて・柏詞 いであなへだいでと
これ・ゐて・ゆりいとくゆりげるゆりくゆるゆ
そや・さういせこそちゐべくめんのれおばしを
ありづさつゐるりやとゆりづ
柏 いるれが・ゐるあづさ・ゐの・ゐをあてれづ
そをゐ・詞 ゐのゐのさくろひとゐまるゆるろ
よ・おやもとゆばゆるこそ・ゐずるひょうへばで
あゐ・おちさるれ・ゐもひや・それでとさうて
タ 柏 おゐれづさこもこぢりもうでう
るれあこわくべさ・詞 ゆりるるこひうをもむさる

のこやもとういそ・ワづうれがとういとず
ゆあづとるまいゆまぎこうてどのくわれめんの
柏 あいれゆはいとのひろづ
柏 おけっさ心ありて・手ばうすゐをするこ・人やりお
らばさうぐもく心ぼそさりくあれど・我方ゐが
うてお・どっさつるゆさんとのこ心をぢり
すっよ・ゆタべろ・こいるるくゆやとそいうるく
んありよ・まるさばろうそ・ゆのろ柏 さ方を
ぐよんとそくもるそのへこそ・
アそめよもるやすさ柏いこうゆへのうゆろ
ひうろづもるよをものづこともうくをものゐを